下町文化

NO. 307
2024.9.27

SPORTS & SUPPORT
KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
https://www.city.koto.lg.jp/

江東区文化財保護強調月間2024

歴史と文化を考えよう

昭和57年度より始まった「江東区文化財保護強調月間」は、わたしたちのふるさと江東区に残る貴重な文化財の数々を大切にしていこうという運動です。今回で43回目を迎え、「歴史と文化を考えよう」というテーマで、毎年10月から11月までの期間にさまざまな催しを行います（詳細は2・3頁）。

写真1　（絵葉書）新大橋開橋式余興角乗（明治45年7月）

写真2　木場の角乗

写真3　富岡八幡の手古舞

写真4　（絵葉書）深川富岡八幡宮大祭 仲町名妓連の手古舞

□江東区文化財保護強調月間2024
民俗芸能大会
文化財講演会
東京9区文化財古民家めぐり
江東区伝統工芸展
○江東歴史紀行
佐久間象山の足跡と文化財
○近代の絵葉書から景観を復元する
深川公園北西部にあった池～震災以降編～
○江東外見発見伝
「亀戸天神社の社号標石」－追考－

伝統を受け継ぎ、未来へとつなぐ

写真のうち1は明治45年（1912）の新大橋開橋式で木場の川並衆がはしご乗りを披露しているものです。4では昭和8年（1933）の富岡八幡宮大祭で練り歩く芸妓たちの手古舞が見られます。いずれも保存会により今日に受け継がれ、毎年10月の民俗芸能大会でご覧いただけます（写真2・3）。

民俗芸能大会

10月20日（日）
会場　都立木場公園

【午前11時～12時30分】
場所　入口広場（角乗池）

木場の角乗　東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師（川並）は、鳶口一つで材木を筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時30分～3時40分】
場所 イベント広場（メインステージ）

木場の木遣　木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を繰る時、お互いの息を合わせるため、歌われた労働歌です。

木場の木遣念仏　木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子　砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社（現葛飾区葛西神社）の神官が農民に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞　富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣を歌いながら、男髷に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川の力持　深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。

木場の角乗（右上）
富岡八幡の手古舞（右下）
砂村囃子（中上）
木場の木遣（左上）
深川の力持（左下）

文化財講演会

「復原された旧渋沢邸の特徴と魅力
―渋沢栄一・篤二・敬三の3代で受け継がれた住まい―」

渋沢栄一は、明治9年（1876）に深川福住町（現永代2）の屋敷を購入して転居し、清水屋（現清水建設㈱）に「表座敷」を増築させました。屋敷は、明治41年に三田綱町、戦後は青森県六戸町に移築されましたが、ふたたび江東区に里帰りしました。講演会では屋敷の特徴と魅力をご紹介します。

日時　11月20日（水）
午後6時30分～8時

場所　教育センター1階大研修室（東陽2―3―6）

定員　50人（応募多数の場合は抽選）

費用　無料

講師　内田青藏氏（江東区文化財保護審議会委員、神奈川大学特任教授）

応募期間　10月1日(火)～10月21日(月)必着　**（10月1日の郵便料金改定にご注意ください）**

申込方法　区HP申込。または往復はがき（1枚につき2名まで）往信面裏に①「文化財講演会」②住所③氏名・ふりがな④電話番号を記入、返信面表に応募者の⑤郵便番号⑥住所⑦氏名を記入し、〒135―8383 江東区役所文化観光課文化財係へ。

東京文化財ウィーク2024

「東京9区文化財 古民家めぐり」

期間　10月1日（火）～11月30日（土）

今年度も東京文化財ウィークの関連事業として、東京9区文化財古民家めぐりが開催されます。

文化財古民家を所有する都内の9区（足立・板橋・江戸川・北・杉並・世田谷・練馬・目黒・江東）では、連携して企画事業を行っており、今年度は「古民家彩時記」と題して、四季をテーマとしたパネル展示を各古民家で行います。

江東区では、江戸時代後期の民家建築である旧大石家住宅を、仙台堀川公園内（南砂5―24地先）に移築し、公開しています。他区の古民家の情報につきましては東京都教育庁の「東京文化財ウィーク2024」ページ内の企画事業欄をご参照ください。

旧大石家住宅

この機会に、各区の古民家をめぐって、各住宅の特徴を見比べていただければ幸いです。

旧大石家住宅の開館日・時間
開館日　土曜日・日曜日・祝日
開館時間　午前10時から午後4時

無形文化財公開事業

江東区伝統工芸展

入場無料

日時　10月31日(木)～11月4日(月・休)
午前10時～午後4時

会場　深川江戸資料館　地階レクホール
(江東区白河1―3―28)

43回目となる本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演・体験を行います(日程表参照)。また、今回は表具の特集展示を行います。ぜひご観覧ください。

実演・体験時間

〈午前の部〉午前10時～ 12時30分
〈午後の部〉午後1時30分～4時

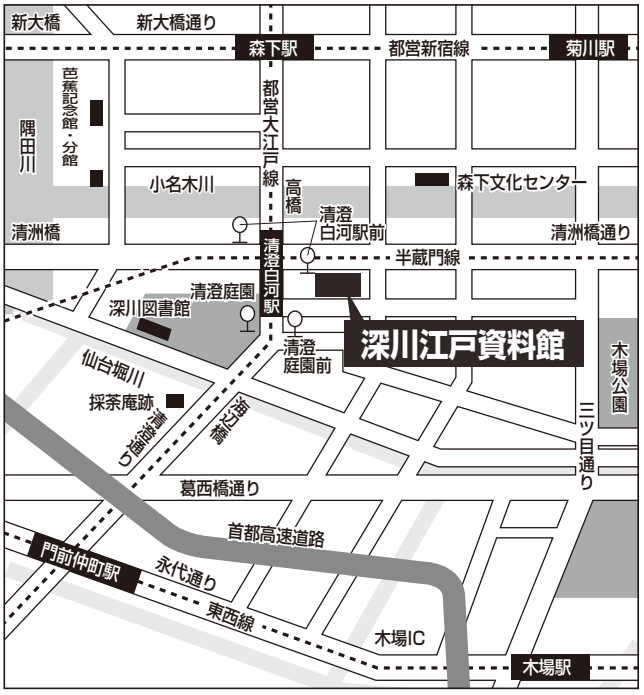
日程表のうち、　　の技術は体験ができます(有料)。申し込みは会場で直接職人さんに申し出てください(材料が無くなり次第終了します)。

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

会場・深川江戸資料館への交通

- ●東京メトロ半蔵門線「清澄白河」下車徒歩3分
- ●都営大江戸線「清澄白河」下車徒歩3分
- ●都バス門33「清澄庭園前」下車徒歩3分
- ●都バス秋26「清澄白河駅前」下車徒歩4分



実演公開日程表

日程		技術「体験内容　費用」	保持者
10/31(木)	午前	表　具「裏打ち体験 1,000円」	岩崎　晃
		江戸切子	小林淑郎
		刀剣研磨	臼木良彦
		染色補正	丸田常廣
	午後	表具	岩崎　晃
		更紗染	佐野利夫
		建　具「組子 枡つなぎ1,000円／亀甲麻の葉1,500円」	友國三郎
		茶の湯指物「箸 1,500円/小箱 2,000円」	山田一彦
11/1(金)	午前	表　具「裏打ち体験 1,000円」	岩崎　晃
		無 地 染「手ぬぐい・トートバッグ 2,500円」	近藤良治
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
		茶の湯指物「箸 1,500円/小箱 2,000円」	山田一彦
	午後	表具	岩崎　晃
		無 地 染「手ぬぐい・トートバッグ 2,500円」	近藤良治
		染色補正	丸田常廣
		襖楷・襖縁	鈴木延坦
11/2(土)	午前	更紗染	佐野利夫
		刀剣研磨	臼木良彦
		襖楷・襖縁	鈴木延坦
	午後	更紗染	佐野利夫
		建　具「組子 枡つなぎ1,000円／亀甲麻の葉1,500円」	友國三郎
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
11/3(日・祝)	午前	表　具「裏打ち体験 1,000円」	岩崎　晃
		木 彫 刻「根付 平面500円/立体2,000円」	渡邉美憲
		紋章上絵	亀山晴男
		相撲呼出し裁着袴製作	山口由紀
	午後	表具	岩崎　晃
		木 彫 刻「根付 平面500円/立体2,000円」	渡邉美憲
		建　具「組子 枡つなぎ1,000円／亀甲麻の葉1,500円」	友國三郎
		茶の湯指物「箸 1,500円/小箱 2,000円」	山田一彦
11/4(月・休)	午前	表　具「裏打ち体験 1,000円」	岩崎　晃
		木 彫 刻「根付 平面500円/立体2,000円」	渡邉美憲
		刀剣研磨	臼木良彦
		茶の湯指物「箸 1,500円/小箱 2,000円」	山田一彦
	午後	表具	岩崎　晃
		木 彫 刻「根付 平面500円/立体2,000円」	渡邉美憲
		刀剣研磨	臼木良彦
		襖楷・襖縁	鈴木延坦

(順不同・敬称略)

※都合により変更する場合もあります。ご了承ください。

江東歴史紀行

佐久間象山の足跡と文化財

佐久間象山肖像
『近世名士写真 其2』
（国立国会図書館デジタルコレクション）

江戸時代後期の松代藩士である佐久間象山は、砲術・蘭学・儒学など多くの学問を修め、数多くの門人を輩出したことで知られます。江東区内でも、嘉永年間（１８４８～１８５５）に深川小松町（永代１―14付近）にあった松代藩下屋敷で西洋砲術・兵学[1]を教授していました。

そこで、本号では佐久間象山の砲術・兵学者としての面と江東区域における足跡や関連する文化財についてご紹介します。

【生い立ち】

佐久間象山は文化８年（１８１１）２月28日、松代城下の信濃国埴科郡に生まれます。名は啓、通称は修理で、象山は号です。父の国善（通称一学）は藩の側右筆、表右筆組頭を務めた人物でした。

文政11年（１８２８）に家督を継いだ象山は、天保４年（１８３３）に江戸遊学を許され、儒学者の佐藤一斎に師事します。同７年に一時帰藩した後、同10年に再び江戸に出ると、最初の塾である「象山書院」を神田お玉が池（千代田区岩本町２―５付近）に開きます。

当初、この塾で象山が教授していたのは朱子学で、まだ後の西洋砲術家・蘭学者の面は見られませんが、その状況が一変するきっかけが、天保11年（１８４０）に勃発したアヘン戦争でした。

【転機】

当時の日本で大国とされていた清国がイギリスに敗れるというアヘン戦争情報は幕府に衝撃を与えました。そして、老中水野忠邦主導の天保の改革により海防政策の見直しと体制の強化が図られます。

松代藩では、天保12年（１８４１）、藩主真田幸貫が老中・海防掛となります。幸貫は象山を自らの顧問役とし、海外事情の研究を命じました。幸貫の実父は寛政の改革で知られ、霊巌寺（白河１）に墓所があることでも知られる松平定信です。

アヘン戦争について象山は、天保13年（１８４２）10月の書簡に「清国と我が国はわずかの海路を隔てるのみなので、我が国のこととととらえ、海岸防備を整えるべき」という内容を記しています。そして、以後は西洋砲術・蘭学の道へと進んでいくこととなります。このことから、アヘン戦争が象山の生涯に与えた影響は大きかったといえます。

【韮山塾入門】

天保13年、象山は西洋砲術を学ぶため、伊豆韮山代官の江川英龍が開いた韮山塾に入門します。英龍は高島流砲術（西洋砲術）を開祖である高島秋帆から伝授されていました。

同年12月の象山の書簡には「御内意を受け候て西洋法之火術を学び」とあり、藩命によって入門したことがわかります。江川文庫に残る『江川英龍門人録』によると、象山の入門は９月７日と記録されており、これは江川家中以外では最も早い入門者でした。また松代藩からは同月10日に12人、翌年には21人が入門しています。これは他藩に比べて比較的早い時期に多くの藩士が入門しており、老中・海防掛であった藩主の意向があったと推察できます。

象山は入門中の天保13年11月、幸貫へ「海防八策」と呼ばれる上書を提出します。ここには、大砲の製造や軍艦の建造といった軍備増強だけでなく、交易の推進、さらには教育の普及も含まれており、儒学者としての一面も垣間見えます。そして、象山は入門から半年あまり後の天保14年（１８４３）２月６日に西洋砲術の免許を得ています。

【下曽根信敦に師事】

韮山塾で西洋砲術の免許を得た象山ですが、砲術伝書を直接見て研究したいという思いから、旗本の下曽根信敦に師事します。信敦は英龍と同じく、幕命により高島秋帆から高島流砲術の伝授を受けていた人物です。象山は信敦から高島流砲術の秘伝書を借り受けて研究しています。そして、弘化２年（１８４５）には信敦が武州徳丸原（板橋区高島平）で行った調練にも参加しています。

ただ、この行動が英龍側には不義理と捉えられたようで、江川英龍とは疎遠になります。象山の書簡からは、英龍と音信が途絶えていること、自身の行動は不義理には当たらないという主張、伝書の扱いについて英龍を批判して信敦を賞賛する内容が見て取れます。

この後、象山は西洋砲術伝書の基となったオランダの砲術書や百科事典の原書を研究するためにこれらを入手、さらにオランダ語を学ぶため、蘭学者坪井信道の塾頭黒川良安に師事します。

弘化3年（1846）閏五月、象山は松代に帰藩します。松代では藩命による大砲の鋳造や、嘉永元年（1848）頃からは大砲の教授を行うほか、蘭書の翻訳を行っていました。特に蘭和事典『ドゥーフ・ハルマ』の改訂出版に執心し、幕府に出版願いを出すため、嘉永2年（1849）から翌年にかけて2度江戸へ上り、下屋敷に滞在しています。

【松代藩下屋敷で砲術塾を開く】

嘉永3年（1850）7月、再び江戸へ上った象山は、下屋敷に「西洋砲術塾」の看板を掲げます。象山は自身の砲術を「西洋砲術真伝」と称しており、ここからは「高島秋帆―江川英龍・下曽根信敦」と伝授された西洋砲術（高島流砲術）とは別に、自らオランダの砲術書・兵学書の原書を研究した結果という姿勢がうかがえます。

象山の死後に門人たちがまとめた『及門録』には嘉永2年以降の門人の名が記録されていますが、嘉永3年以降は松代藩士だけでなく、数多くの藩からの入門者が記録されています。特に福沢諭吉の出身で知られる豊前中津藩からは70人余りの藩士が同年中に入門、象山は1か月の間に数回中津藩下屋敷（品川区高輪）へ出向き稽古を行っていました。

そして、幕臣の勝海舟も嘉永3年に入塾しています。勝海舟の号「海舟」は象山の「海舟書屋」という書が由来です。嘉永5年（1852）には、側室はいたものの正室はいなかった象山は、海舟の妹を正室として迎え入れ、両者は義兄弟となりました。

このほか同年には、五稜郭を設計した武田斐三郎（伊予大洲藩）や山本覚馬（会津藩）が入門しています。

下屋敷滞在中の象山は塾での教育、下屋敷で行われた調練への参加、中津藩や松前藩からの依頼を受け大砲の鋳造を行っていました。しかしながら、12月には藩命により門弟数名を引き連れて帰藩しています。

【木挽町に開塾】

帰藩した象山でしたが、江戸在府の許可が下りると嘉永4年（1851）4月には再び下屋敷に入ります。しかし、下屋敷では手狭となっていたため、藩から開塾費用130両の下賜を受け、同年8月に木挽町五丁目（中央区銀座6―15付近）に塾を開きます。この私塾は後に象山が吉田松陰の密航事件に連座して失脚するまで続きます。先述の『及門録』には300人以上の入門者が記載され、その中には坂本龍馬（嘉永6年入門）の名も見られます。

【長州藩邸で大砲鋳造を指導】

象山は各藩からの依頼を受けて大砲を鋳造していましたが、長州藩の大砲鋳造の指導も行っていました。

長州藩では嘉永6年（1853）7月のペリー来航を受けて、三浦半島の台場に設置する大砲の鋳造を計画します。そして同年12月に国元から鋳物師の郡司右平次を砂村（南砂2―3）の藩邸（抱屋敷）に呼び寄せて大砲の鋳造を行いました。翌年2月から鋳造が始まり合計36門が鋳造されました。

後に長州藩はこの大砲を下関に移し、元治元年（1864）の下関戦争で使用します。長州藩の敗北により戦利品としてフランスに持ち帰られた大砲は、パリのアンヴァリッド（廃兵院）に収められました。現存する大砲には長州藩の家紋のほか、

「十八封度砲　嘉永七歳次甲寅季春
　　於江都葛飾別墅之鋳」

と刻まれており、砂村の長州藩邸で鋳造されたことがわかります。

象山が長州藩に対し、どのような指導を行ったかは不明ですが、嘉永7年（1854）のものとみられる松代藩士あての書簡には、「長州様」と記載があり、詳細は不明ですが長州藩とのやり取りがあったことがうかがえます。

【その後の象山】

順風に見える象山でしたが、嘉永7に吉田松陰の密航事件に連座して入獄、私塾も閉鎖となります。死罪こそ免れますが、文久2年（1862）の赦免まで、国元での蟄居生活を送りました。そして元治元年に幕命により上洛、しかしながら公武合体論と開国論を説いたことが仇となって尊皇攘夷派に狙われ、同年7月11日に暗殺されてしまいました。

【おわりに】

佐久間象山が江東区域で主に活躍していたのは、嘉永3年7月～12月の半年あまりでした。しかしながら、その後の私塾開塾の基になる教育が江東区内で行われたことを知っていただければ幸いです。

【関連文化財】

・区登録史跡「佐久間象山砲術塾跡」
（永代1―14付近）
・区登録史跡「長州藩大砲鋳造場跡」
（南砂2―3付近）
・区登録史跡「越中島練兵場跡」[2]
（越中島）

1）砲術は銃や大砲を扱う技術についての学問。兵学は軍の運用や戦術についての学問。
2）安政5年（1858）、同地に講武所の銃隊調練場が設置、講武所では高島秋帆・下曽根信敦・勝海舟が砲術師範を務めた。

（文化財専門員　勝田真幸）

近代の絵葉書から景観を復元する

深川公園北西部にあった池～震災以降編～

深川公園の北西部にあった池について、前号（No.306）の「震災以前編」に引き続き、関東大震災以降に発行された絵葉書を用いて、震災以降から戦前にかけての景観を復元してみます。

平面図で比較する震災前後の池

大正12年（1923）9月1日に起きた関東大震災によって池を含めた一帯が被災します。公園の南西部（池の南）にあった深川図書館は現在地（清澄3―3―39）に移転・再建され、池は再整備されるものの、水域が狭められました。震災以前の平面図（図1）と以降の平面図（図2）を、不動堂との境界線（池南東角部）を基準に比較すると、池および中の島の面積が狭小になったことが分かります。しかし、橋など各施設の大まかな配置は震災以前とほぼ同様と言えます。

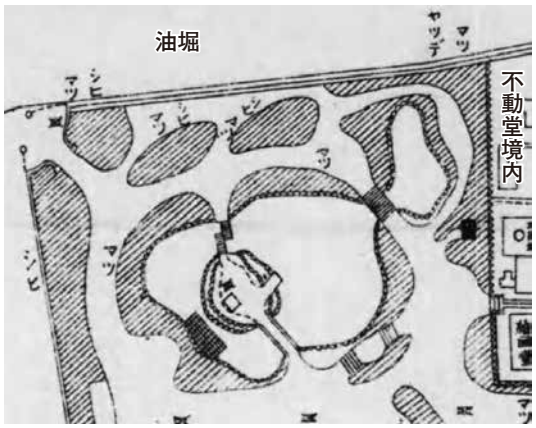


図1　関東大震災以前の池（平面図）
※『大正の大地震及大火と帝都の樹園』（大正12年）（国立国会図書館デジタルコレクション）掲載の「火災前深川公園樹林状況図」を元に作成

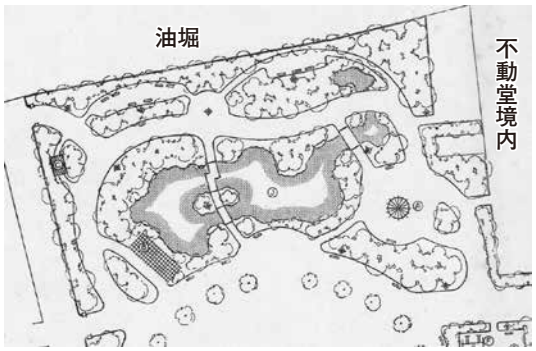


図2　関東大震災以降の池（平面図）
公益財団法人東京都公園協会所蔵の『深川公園平面図』（昭和6年）を元に作成

絵葉書と写真で見る震災以降の池

震災以降に発行された絵葉書は現在までのところ当係所蔵の3点しか確認できません。今回、そのうちの2点（写真1・2）とともに写真資料3点（写真3～5）を援用しながら、当時の景観を復元してみます。

写真1　池　南西から東方向
（絵葉書「深川公園ヨリ不動尊本堂ヲ望ム」発行時期:昭和3～8年）

写真1は池の南西から東方向を写したもので、手前に土橋が、奥中央に深川不動堂の本堂が見えます。ちなみに本堂の再建工事は大正14・15年頃に着工し、昭和3年（1928）に竣工しますが、昭和20年3月10日の東京大空襲で焼失してしまいました。土橋（柴橋）は震災以前と同様、橋脚などの部材は丸太状に組まれており、橋面（床板）に土を盛り、両端に草が植えられています。この土橋については、『橋・泉池・壁泉』（上原敬二著、加島書店、昭和35年）に橋自体の記述は無いものの平面図・側面図・断面図が掲載されており、おおよその構造を知ることができます。これによれば、長さ30尺（約9m）、幅9尺（約2・7m）を測り、橋脚（9本）および橋桁は擬木（コンクリート製）で、橋脚の下には「松丸太」（地中杭）が打たれていたことが分かります。

写真2　池　南東から北東方向
（絵葉書「（東京深川名所）深川公園」発行時期:昭和8～12年）
※右上は橋部分、右下はベンチおよび護岸部分をトリミング

写真2 a.護岸とベンチ（左写真2の部分拡大）

写真2 b.橋（左写真2の部分拡大）

写真2は土橋東の池南岸辺りから北東方向を写したもので、右手奥に不動堂本堂（手前に松）が見えます。池の護岸は震災以前同様に玉石が使われています。護岸近くには背もたれ付きのベンチ（コンクリート製の擬木か）が5基見え、そのうちの1基には3人の男性が腰をおろし歓談している様子が窺えます（写真2a）。左には、大小5つの丸い透かしのある欄干（透かしの中位には金属製と推定される装飾）が印象的なコンクリート製の橋が設置されています（写真2b）。

写真3は池の南（土橋の南東辺り）から東方向を写したものです。写真2と同じく、池の護岸から斜めに生える松が見えます。手前の護岸沿いには箱状のもの（正面に「□□入」の文字と東京市章、側面に「深川公園」と書かれている。ゴミ箱か?）と背もたれ付きのベンチ3基（鋳鉄・木製か）が並べられ、その右（南）に水栓（水飲み場）が設置されています（『橋・泉池・壁泉』には、形状が違う水栓の断面図を掲載）。奥の不動堂本堂より手前には三角状の物体が見えますが、これは円錐状の屋根を持つ「傘型四阿」（休憩所）です。この四阿については、セメント会社が発行したパンフレット『コンクリート』（昭和11年）に写真が掲載されており、擬木（コンクリート製）であることが分かります（写真5）。

写真4は、池の西から東方向を写したものと推定されます。中央の中の島には、先端が頭を垂れたような高い電燈が設置されています。中の島の左（北）には筋替えの橋が、右（南）には土橋が架かっています。土橋の奥には写真2と同一の橋が見えます。

池の埋め立てについて

昭和13年の段階で池を含む公園西部を運動場にする計画があったことが東京都公園協会所蔵の「深川公園一部改造後平面図」（昭和13年）から窺えますが、この計画は実現しなかったようです。昭和17年3月18日陸軍撮影の空中写真（本誌No.306P6写真1）を見ると、この頃まで池の景観を保っていたようですが、それから数年後（戦時中）に埋め立てられてしまったようです。埋め立てに関する資料が残っていないため不明な点が多いのですが、戦時中に高射砲陣地にするため池を埋めたという、近隣に在住の方の証言（「参道かいわいの思い出」『成田山深川不動堂三百年史』平成14年）があります。これに関連して、戦後、池に生息していた亀や鯉などを供養する石碑「亀鯉供養之碑」が地元有志によって建立され、深川不動堂境内南西部に今も残っています。

（文化財主任専門員　野本賢二）

写真4　池　西から東方向
「震災復旧工事が完成した時 深川公園」（昭和5年撮影、公益財団法人東京都公園協会所蔵）

写真3　池　南から東方向
昭和13年撮影、成田山仏教図書館所蔵

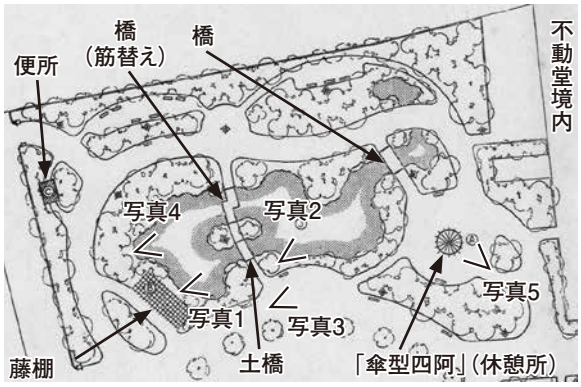


図3　震災以降の池の各施設および写真の撮影方向
公益財団法人東京都公園協会所蔵の『深川公園平面図』（昭和6年）を元に作成

写真5　「傘型四阿」
※『パンフレット 20号 コンクリート 擬木・擬石（設計・施工）』（日本ポルトランドセメント同業会、昭和11年）（国立国会図書館デジタルコレクション）

写真6　池があった多目的広場
※令和6年8月撮影。中央奥は深川不動堂

記事の訂正

前号（No.306）P7最上段10～13行目を次のように訂正します。

誤：昭和20年（1945）3月の東京大空襲による被災を経て、戦後に埋め立てられます。

正：戦時中（昭和17年3月以降）に埋め立てられます。

江東外見発見伝

「亀戸天神社の社号標石」-追考-

本誌No.302では、現在、天神橋の西詰の北（墨田区太平4）に置かれている亀戸天神社の社号標石を取り上げて、刻文の内容、さらに、昭和20年（1945）に社号標石を写した写真から置かれた位置について考えていきました（写真1）。

写真1「亀戸天神社号標石」昭和20年
（東京大空襲・戦災資料センター所蔵）

写真2「亀戸天神社号標石」現在

写真1の裏には天神橋から亀戸方面に向けて撮影されたと書かれていますが、社号標石は同橋西詰の北（写真2）に置かれていることから、写真1が撮影された方向は錦糸町方面ではないかと考えました。

しかしながら、No.302刊行後、昔から近隣にお住まいで、幼少期に社号標石を見ていた方（以下、A氏）より、社号標石が天神橋東詰の南（江東区／地図の●印）にあったと記憶していること、さらに、写真1の撮影方向が錦糸町方面であれば、現在の商業施設『オリナス錦糸町』が建てられている場所にあった精工舎（A氏によると、空襲後も鉄筋部分が残っていた）が、写真1中左手に写るはずだが見当たらないので疑問であるといった情報が寄せられました。

地図

このことから本号では、あらためて写真に写されているものを検討するとともに、戦前から戦後にかけて撮られた空中写真から、再度、社号標石の位置について考えてみたいと思います。

亀戸天神社の築地塀

写真1を拡大すると、太丸部分に亀戸天神社の築地塀が確認できます。なお、同社の築地塀は、当該期に撮影されたほかの写真にも写されており、これと比較して同様のものであることが分かります。このことから、写真1はキャプション通り亀戸方面を撮影したものであり、No.302で考察した社号標石が撮影された方向を錦糸町・両国方面と考えたのは誤認でした。

写真3 築地塀（部分拡大）

なお、もともと社号標石が建てられていた場所は、同社の参道の入口を示していたものと思われますが、以上のように他の場所に移転されることで、本来社号標石がもつ意味も分からなくなることがあります。

戦前の空中写真

社号標石が写された戦前の写真には、昭和11年・同19年に、旧日本陸軍によって東京東部広域を撮影した空中写真があります。このうち後者（比較的鮮明）に写る天神橋あたりを拡大したのが写真4です。写真中の天神橋東詰部分を目を凝らして観てみると、太丸部分に黒い影が写し出されているのが確認できます。この黒い影の正体が社号標石と考えられます。以下、年代を追ってみていきます。

写真4 昭和19年（1944）
（陸軍撮影「国土地理院空中写真データ」より部分拡大）

戦後の空中写真

戦後、米軍により東京東部を撮影した空中写真は複数ありますが、このうち比較的鮮明なもののうち、昭和22年の写真5を見ると、写真4と同様に東詰に黒い影が写し出されています。さらに、同31年の空中写真（写真6）と翌32年の空中写真（写真7）を比較すると、東詰部分が更地となり、西詰に現在と同様のカーブ状の部分と横十間川に沿う道ができていることが確認できます（写真7太丸）。

写真5 昭和22年（1947）
（「米軍撮影 国土地理院空中写真データ」より部分拡大）

写真6 昭和31年（1956）
（「米軍撮影 国土地理院空中写真データ」より部分拡大）

写真7 昭和32年（1957）
（「国土地理院空中写真データ」より部分拡大）

社号標石の移転時期について

以上のことを勘案すると、社号標石の移転時期は、昭和22年以降32年に至る10年の間と推察されます。ちなみに、移転の事情が分かる公的な文書は見つかっておらず、理由は不明ですが、天神橋付近が整備された際に移転されたものと考えます。

（文化財専門員　大関直人）